

審査の結果の要旨

氏名 張 智恩

本論文は、非劇場形態による映画上映・鑑賞活動が社会的価値を生み出す形態を「公共上映」と規定し、映画市場の社会的状況・公共施設の上映・映画市民活動という3つの軸で戦後の公共上映の展開過程を構造的にとらえ、公共セクターと映画市民活動の協働関係の発展を豊富な資料とアンケート調査、訪問調査によって明らかにした実証的研究である。

戦後当初、映画は教育映画・視聴覚教材として活用され、社会教育をつうじて啓蒙的に普及する。1970年代以降、次第に公民館から図書館、文化会館に映画上映が広がり、映画専門機関も設立される。本論文では、このような制度的公共上映が映画の有効活用、上映機会の地域的普及などの条件を生み出してきた一方で、映画市民活動のとりくみによって市民と行政の協働による上映形態が広がり、市民映画祭やコミュニティ・シネマなどの市民参加型の共同鑑賞の組織化と地域的な鑑賞空間の設立をつうじて、より市民的な映画文化の発展の社会的条件が作りだされてきたことに注目し、その意義を考察している。

論文は序章、第1章から第4章、終章で構成されている。序章では本論文の主題である「公共上映」の概念と社会教育の関係把握について、先行研究によりながら分析枠組みを設定している。第1章では戦後直後から1950年代にいたる映画の教育的活用と公共上映の初期的展開を歴史的に考察している。第2章では1960年代から70年代に映画産業が斜陽期を迎えるなかで、公立社会教育施設、市民映画サークル運動の双方から非営利的な映画上映のとりくみがすすむ矛盾的な構造を明らかにしている。第3章では地域文化としての自主上映が定着するとともに、文化会館においても市民の参加・鑑賞活動の育成がはかれる状況があらわれ、他方で、市民主導の自主上映館が誕生する経過が示される。第4章では1990年代以降、文化庁の文化政策においても映画振興がうたわれ、映画の非営利的普及システムの枠組みが国家・民間協同で推進されるようになり、コミュニティ・シネマとして地域的に根づいていく過程が明らかにされる。このような歴史的過程の分析を経て、終章では、公共上映の発展をささえる映画認識の深まりと成人学習実践としての意義、及び社会参加を促す装置としての「共同」の意義が考察される。

本論文は、成人学習過程としての共同鑑賞が映画文化の発展をささえていることをふまえて、「公共上映」という斬新な概念を提起し、膨大な歴史的事象を体系的に整理し、映画文化をささえる社会的な担い手の協働関係の発展と共同鑑賞における映画認識の深まりの過程を明らかにした。精力的な資料収集によって従来断片的にしかとらえられてこなかった映画市民活動を歴史的に考察した本論文の意義は大きい。映画鑑賞と成人学習実践の内在的な分析は今後の課題であるが、他の文化的メディアにも応用しうる可能性もつ視点を提起し、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文であると評価された。